

## 特集にあたって

# 子どもと家族の健康な生活を支える 外来看護

近年、小児医療の進歩に伴い、救命が困難とされた子どもが支援を受けながらも成長・発達できるようになってきました。慢性疾患と向き合いながら生活する子どもや医療的ケアを必要とする子どもが増加し、外来診療を継続することにより子どもたちの健康維持や健康増進が支援されるようになってきました。子どもを取り巻く社会的問題には、虐待、いじめ、自殺、食育、子どもの貧困、格差社会など、解決に向けて取り組まなければならない課題が山積しているのが現状です。外来看護では子どもの生活環境の把握や子どもへの支援の調整も含め、子どもが健やかに成長・発達しているよう地域における包括的な支援者の一員としての役割が期待されていると考えます。

子どもが受診する外来は、自宅から近い小児科やクリニックであることが多いため、専門的診断や治療を目的とした場合、地域の中核病院である総合病院や大学病院などを受診することになります。診療の補助だけでなく、外来での検査処置が多く繁忙な外来であることや、子どもの年齢や発達段階に応じた対応に時間が必要となることが少なくありません。外来は子どもと家族の生活を確認したり、解決すべき課題を抽出し必要であればすぐに解決に結び付ける貴重な機会となります。子ども自身の疾患や治療の理解に加え、セルフケアに対する教育的介入が必要な場合があり、個々の子どもの身体的・心理的・社会的な健康に対する支援には、個々の子どもと家族にかかわる十分な時間確保が必要です。

地域で生活する子どもが健やかに成長・発達するための支援は、外来看護が大きな役割を担っていると考えます。近年では小児診療における移行期支援やAYA (adolescent and young adult) 世代への支援が課題として注目されるようになり、病院によっては移行期支援チームやAYAに関するチームを立ち上げ、小児科医師あるいは看護師の枠を超えて、成人医療の医師や看護師と協働した取り組みが報告されています。本誌2019年6月号では、小児看護専門看護師による看護外来や専門部門における小児外来での活躍が紹介されましたが、小児外来の多くはジェネラリストの実践によって支えられています。

そこで本特集では、“病院における小児の外来看護”を再考したいと考えました。小児専門病院、地域中核病院、大学病院などで実践されている看護師の方々に執筆していただくとともに、小児外来での支援者として、医師をはじめ保育士、ホスピタル・プレイ・スペシャリスト(HPS)、臨床心理士、医療ソーシャルワーカーにも活動の実際について紹介いただきました。外来が担う役割は拡大し続け、看護の充実を図る取り組みが注目されています。

本特集が、小児の外来看護に期待される役割について再確認し、チーム医療としての外来機能の強化や専門性を発揮した実践につながる一助となれば幸いです。

河俣あゆみ Kawamata Ayumi

三重大学医学部附属病院小児トータルケアセンター  
副センター長、看護師長/小児看護専門看護師